

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学 研究科 映像身体学 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科映像身体学専攻 博士後期課程1年	河野 真理江 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部映像身体学科	中村 秀之 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	1950年代日本映画におけるメロドラマの分岐—ジャンルの動態に関する実証的研究—		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科映像身体学専攻 博士後期課程1年	河野 真理江	
研究期間	2012 年度		
研究経費	197 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

50年代後半の日本映画におけるメロドラマ・ジャンルの分岐を、映画史研究、ジャンル研究の立場から、実証的かつ理論的に考察した。本研究の概要は、以下の二点に集約される。まず、50年代におけるメロドラマ・ジャンルの展開を明らかにするために、メロドラマのプロトタイプを30年代の松竹女性映画におけるスター・システムと女性観客性から検討した。つぎに、日本映画のニュー・ウェーブ期を対象としつつ、これまで看過されてきたメロドラマの過去のサブ・ジャンルに焦点をあて、この時期のメロドラマ映画の変容を多角的に検証した。その際、50年代後半に「文芸メロドラマ」と呼ばれるジャンルが産業的に確立されたことに着目した。このジャンル化の背景には、肉体と性の「解放」を主題とする戦後文学の流行とそのメディア横断的展開、映画倫理委員会の再編、テレビ産業の隆盛にともなう映画界のトレンドの変移などをみることができる。とくに、松竹においては、ユニット製作方式を採用した「文芸メロドラマ」が経営不振の穴埋めとして重要な鍵を果たしたため、垂直統合制度を象徴する「大船調メロドラマ」の枠組みは形骸化し、商品価値も低下、方針の転換を余儀なくされることになった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ メロドラマ } { 松竹 } { 50年代 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度における研究成果は、大きく以下の二つに分類される。①【30年代松竹女性映画にかんする研究】……50年代におけるジャンルの多様化や分岐に対する映画史的背景として、国産メロドラマ・ジャンルのプロトタイプとしての30年代における松竹女性映画を、スター・システムと女性観客性の関係に対する分析を通じて考察した。本研究は、第37回日本映像学会大会で口頭発表をもとに学術論文にまとめられた。(『映像学』通巻87号、2011年掲載) ②【文芸メロドラマの形成と受容にかんする研究】……50年代後半におけるメロドラマ・ジャンルの展開のひとつの事例として、「文芸メロドラマ」とよばれたジャンルに焦点をあて、このジャンルの形成と受容の過程を明らかにすることで、このジャンルを「松竹ヌーヴェルヴァーグ」の同時代的なコンテキストとして位置づけることを試みた。本研究の成果の一部は、2012年6月2～3日に九州大学で開催される映像学会大会で口頭発表を行う予定である。以下、①、②それぞれについて、「研究目的と概要」、「先行研究との関係」、「本研究成果の意義」を記載する。

## ①【30年代松竹女性映画にかんする研究】

- ・ **研究成果概要** 30年代におけるもっとも典型的なメロドラマ映画の形式を明らかにするため、当時もっとも影響力のあるメロドラマを提供していた松竹女性映画のプロトタイプを検証する。その際、戦前期の女性映画において女性観客からの圧倒的人気を確立したとされるスター・上原謙の存在に着目する。映画テキストや同時代のファン雑誌における上原のイメージを分析し、ジャンル映画とスターダム、スター・ペルソナと女性観客の諸関係を理論化する。本研究におけるわたしの主な主張は以下の二点に集約される。第一に、上原謙がその特徴的なスター・イメージを通じて松竹女性メロドラマに対する観客の性的主体性の支配的なモードを構築したという点である。そして第二に、上原謙というスターの存在が、1930年代の日本の主流映画における国産メロドラマ・ジャンルを概念化する上で重要な存在であり、上原のスター・ペルソナは彼個人の特徴であると同時に、ある種のグローバルな男性像の一角をなし、さらには日本映画のメロドラマにおける典型的な男性像の起点にもなったという点である。この時期、上原によって確立されたヒーロー像は、戦後量産されつづけるメロドラマ映画の中で他の多くの俳優によって演じられた男性像に強く影響を及ぼしつづけることになる。大船調女性映画に象徴される30年代のメロドラマにかんする本研究は、映画界の黄金期において、松竹女性映画がこの時期におけるもっとも特権的なメロドラマ・ジャンルとして確立されたことの背景を明らかにした。この時期、主力商品としてのメロドラマ映画は、監督やスターの専属制度、特定の観客層(女性)に特化した商品の量産体制を維持する厳格なスタジオ・システムの管理下で、生産されていたのである。
- ・ **先行研究との関係** 戦前期における日本映画のメロドラマの生産と受容は、上原謙に象徴されるスターに対する女性観客の熱狂的支持と分ちがたく結びついていた。そうしたメロドラマ映画において、上原謙演じる典型的ヒーローの身体性は、しばしば目に見えて「女性的」であった。従来の女性映画研究においては、女性観客は女性スターとの関係において論じられることが多かったが、本研究では同時代の女性たちの「理想の夫」としてスクリーン上に表象された上原謙のスター・ペルソナや身体性を通じて、女性化された男性のイメージに魅了される女性観客性が如何にして構築されたのか分析することを試みた。まず、タニア・モドゥレスキがメロドラマ映画における男性スターの類型について述べた「女性的男性」という概念(註<sup>1</sup>Tania Modleski, "Time and Desire in the Woman's Film," In *Home is Where the Heart Is: Studies in Melodrama and the Woman's Film*, edited by Christine Gledhill, British Institute, 1984, pp. 326-338.)を引き継いで、上原謙という日本映画のスターが、30年代以後地球化しはじめたメロドラマの主流映画の流れの中にあって、女性性と親和する身体的特徴により女性観客の心を掴んだ一人だったとみなした。この議論は、ミリアム・ハンセンが主張したようなヴァナキュラー・モダニズムのグローバル化が直面した一連のプロセス(註<sup>2</sup>ミリアム・ブラトゥ・ハンセン「感覚の大量生産 - ヴァナキュラー・モダニズムとしての古典的映画」『SITE ZERO/ZERO SITE』No. 3、メディア・デザイン研究所、2010年、222頁)のなかに、日本における国産メロドラマの定着を位置づけることを試みた。つまり、外来ジャンルであるメロドラマが、日本国内で地域言語化され、古典的ハリウッド映画の文化的ヘゲモニーを脱構築しながら新しいスター・システムを再編成する一連の過程を、松竹による国産メロドラマ・ジャンルの確立と、典型的なメロドラマ映画のスターとしての上原謙というスター・ペルソナの構築といった事象のなかにみることができるのである。
- ・ **本研究成果の意義** 本研究の成果は、50年代においてメロドラマ映画が経験したジャンルの多様化という問題に取り組むうえで重要な基準となる。30年代のメロドラマ映画は、50年代に比べてあきらかに明確な枠組みを有する。その点では、30年代黄金期に定着していた映画ジャンルは、その後複雑多様化していくジャンルのプロトタイプとして認識しうるものである。本研究が明らかにしたのは、スタジオ・システムが商品の市場価値を維持するために、男性スターを利用して如何にして女性観客性を構築したのかについての特権的な事例であった。本研究は、30年代の国産メロドラマにおける垂直統合制度やスター・システム、観客性、とりわけ「女性観客」という概念のコンテキストとテキストを示したという点で、女性映画研究において一定の成果をあげたと考える。

## 研究成果の概要 つづき

## ② 【文芸メロドラマの形成と受容にかんする研究】

- ・ **研究成果概要** 1950年代半ばから1960年代後半までの間、日本映画界で量産されたジャンル映画・文芸メロドラマは、50年代以降の日本映画におけるメロドラマ・ジャンルの分岐を考察するうえで重要な視点となる。なぜなら、このジャンルは、社会・文化的現象との相関において派生したジャンルであるという点、女性映画の量産体制に際する松竹の垂直統合制度の形骸化を顕著に示すという点、同時代の批評家たちの軽視と無関心によって今日にいたるまで学術的関心の域外におかれてきたという点で、きわめて同時代的な特徴を持っているからである。本研究においては、文芸メロドラマという忘れられたジャンルを再評価するため、これを現象、産業、言説という三つの観点から考察し、ジャンルの形成と受容のプロセスを検証することを目的とした。まず、文学と映画とを包含する社会現象としてのブームの推移を追いながら、映画と文学のアダプテーションをめぐる戦後の変容として、文芸映画がメロドラマへと展開していく過程を考察した。次に、スタジオ・システムによる産業ジャンルとしての文芸メロドラマの確立を、松竹大船調による回収という視点から検証する。最後に、ジャンルの批評的受容における過小評価の動機を批判的に分析することで、文芸メロドラマが今日に至るまで日本映画史の主要な文脈から排除されたことの背景を明らかにした。メロドラマまた本研究においては、とくに五所平之助というひとりの「巨匠」が〈よろめき〉路線と呼ばれるカテゴリーの構築において重要な鍵を果たしたことに焦点を当てた。わたしの主張は、1960年前後の松竹における五所監督の文芸メロドラマが、「大船調」の弱体化を顕著に示すという意味で、“松竹ヌーヴェル・ヴァーグ”のもうひとつの側面として再認識されるべきだということである。
- ・ **先行研究との関係** 本研究において、とくに重視された先行研究との関係には以下の事柄がある。1) これまで30年代を中心に論じられてきた「文芸映画」の戦後の展開としての文芸メロドラマを位置づけること。50年代、文芸映画からサブ・ジャンル化された文芸メロドラマは、テレビ業界の躍進にあえぐ戦後の映画産業で、性描写をめぐる検閲の変化や、〈よろめき〉ブームなどの文化的現象の推移にうながされつつ、セックスに関する刺激的なトピックを盛り込んだ大人向けの映画ジャンルとして成立していた。2) このとき、文芸メロドラマは、その形成過程をめぐって、ハリウッドにおいて今日ではファミリー・メロドラマと呼ばれるところの「アダルト作品」がジャンル化された現象に対して (<sup>註3</sup>Klinger, Barbara, “Local’ Genres,” In Jacky Bratton, Jim Cook, and Christine Gledhill (eds.) *Melodrama: Stage Picture Screen*, 1994, British Film Institute, pp. 134-146)、比較映画史的な意味を持つ。3) 文芸メロドラマの時代の批評的関心は、今日にいたるまでその多くが、専ら大島や吉田らの「ヌーヴェル・ヴァーグ」へと傾いている。しかし、大船調の弱体化を顕著に示すという点では、むしろ「文芸メロドラマ」の確立が重要である。というのも、松竹は東宝争議以降フリーでの活動を余儀なくされた五所平之助と本数契約を結び、傍系プロダクション「歌舞伎座プロ」の庇護のもとで五所に大作文芸メロドラマを製作させ、その大ヒットにあやかりながら類似の作品を大船スタジオで量産するという手法によって、市場を席卷することに成功していたからである。文芸メロドラマは、いわゆる「すれ違い」映画に象徴される他の「大船調メロドラマ」のサブ・ジャンルとは、それが垂直統合制度の枠外で形成されたという点で決定的に異なっていた。4) 50年代後半を境に作家としての五所平之助の再評価は進んでいない。この背景のひとつには、五所がこの時期製作した多くの文芸メロドラマが同時代の批評家たち厳しく批判されたということがあった。本研究では、批評家たちがこの時期五所をどのように過小評価したのかを、批評の傾向を批判的に分析するとともに、五所平之助が取り組んだミザンセーヌの自己革新の具体的な事例を明らかにすることで、文芸メロドラマを「五所イズム」の戦後の展開を文芸メロドラマとの関わりにおいて考察した。
- ・ **本研究成果の意義** 文芸メロドラマを通じて、メロドラマ・ジャンルの展開をめぐる50年代的特質を明らかにした本研究の成果には、次のような意義があると考えられる。まず第一に、今後50年代のその他のメロドラマのサブ・ジャンルの変遷や特徴を知るうえで有効な先行研究となるだけでなく、本研究で得られた知見をふまえて、さらに別の視点からジャンルを分析することを可能にするため、ジャンルのより多層的な理解を促進させる。第二に、文芸メロドラマは、日本映画のニュー・ウェーブの核心部といえる「松竹ヌーヴェル・ヴァーグ」にかんして、これまで看過されてきた部分を明らかにしているため、今後「松竹ヌーヴェル・ヴァーグ」という現象を理解するうえで不可欠な情報源となる。第三に、本研究は、『挽歌』(1957年)、「井上靖・愛の三部作」(1960～1961年)といった作品を通じて、五所平之助の文芸メロドラマにおける仕事を詳細に調査したため、50年代後半以降停滞状態にあった五所平之助の作家性に対する再評価の足がかりとなる。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①□誌論文

河野真理江、「上原謙と女性映画——1930年代後半の松竹大船映画における女性観客性の構築」、『映像学』、通巻87号、2011年、24-43頁

② なし

③ なし

④学会発表

河野真理江、「上原謙と”女性的男性”——1930年代日本における女性映画とメロドラマー」、第37回日本映像学会大会、北海道大学、2011年5月28日